２１世紀の日本のかたち（９１）

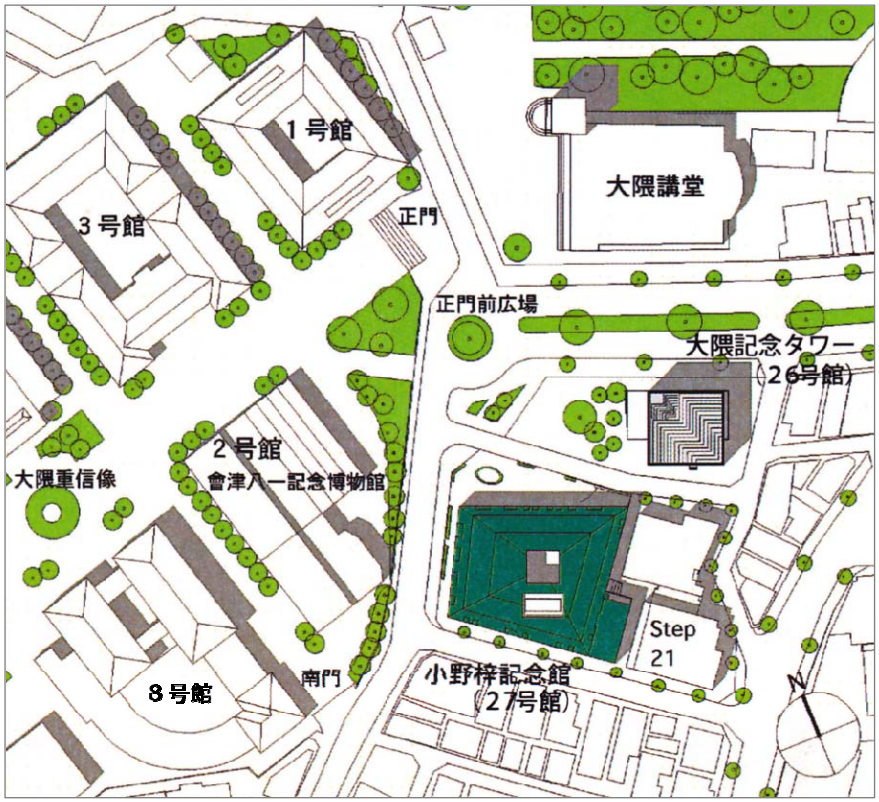
建築について（５）
時代を映す大学キャンパスのかたち
—早稲田大学の場合（つづき）

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

５．創立１２５周年記念事業の展開—大隈記念タワー、小野梓記念館、正門前整備計画

平成12年、日本は20世紀を越え、21世紀に入りました。早稲田大学は125年を単位に早稲田W世紀としています。この早稲田世紀を記念して、大学ではいくつかの記念事業を展開しました。この事業に私も参画し、正門前整備計画、大隈記念タワー、小野梓記念館の設計に関与する機会を奥島孝康総長（14代）により与えられました。これについて代表理事の部屋（74）に若干紹介しましたが、実際に大学が125周年を迎えた時点で、大隈記念タワー、小野梓記念館、正門前整備計画の考え方を、『早稲田学報1168号　2008年4月号』に寄稿した一文があり、新しい資料を入れて若干加筆して以下に再録しておきます。

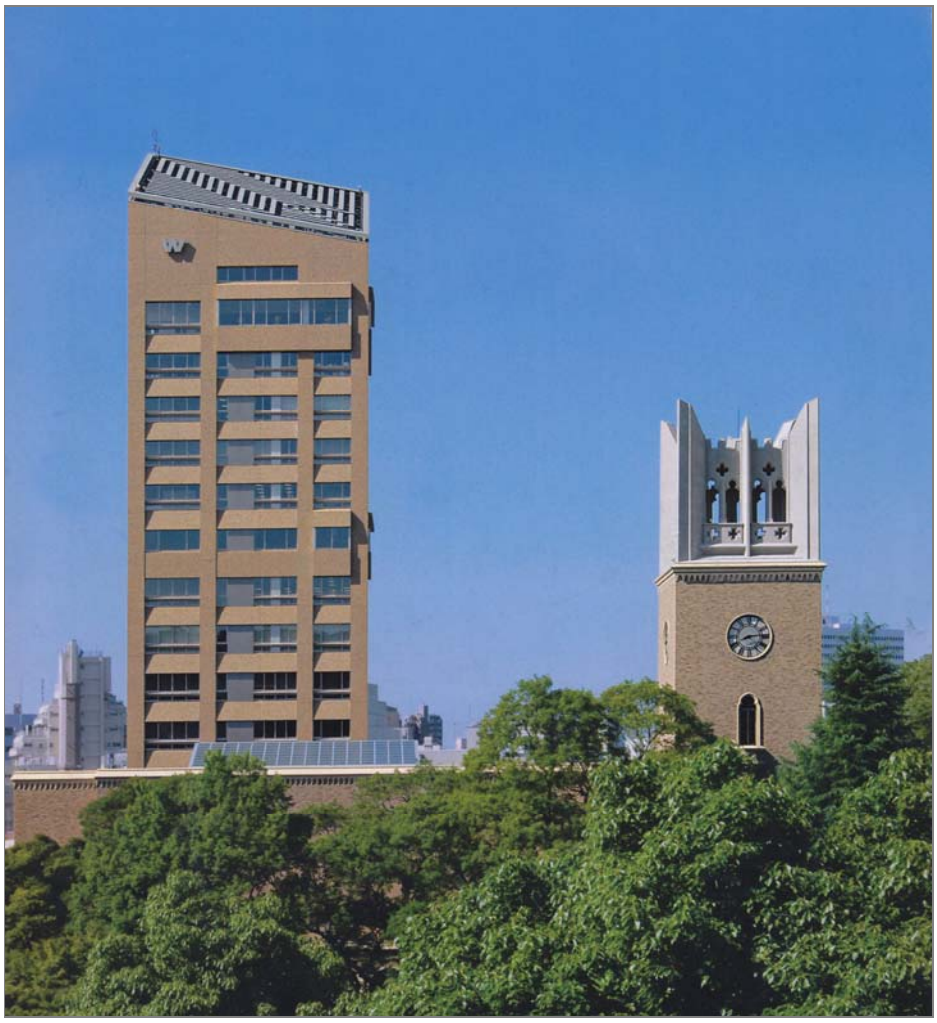
図１　早稲田キャンパス　正面前配置図



２５０尺の大隈記念タワー

2007 年 10 月 21 日、早稲田大学は「東京専門学校」開校から創立 125 周年を迎え、この日、記念会堂（戸山キャンパス）で内外の招待者 3,000 名余を集めて盛大な記念式典が行われ、白井克彦総長（当時）がこれまでの大学の歴史を総括しながら、次の早稲田第二世紀に向かう展望と決意を表明されました。続いて来賓を代表して、校友でもある福田康夫内閣総理大臣（当時）が大隈記念タワー250 尺に触れ、これからの 125 年に向かって発展を願うと祝辞を述べられました。

写真１　２５０尺の大隈記念タワーと１２５尺の大隈講堂時計塔



創立 45 周年（1927 年）に竣工したヨーロッパ・ゴシック風の大隈講堂の時計塔は、大学の創設者、大隈重信の人間の寿命 125 歳説を受けて 125 尺に設計されております。これに寄り添う大隈記念タワーは次なる 125 歳を加えて 250 尺（75.75m）とし、塔頂には稲の甲骨文字を稲文化の形象として掲げました。傾斜する屋根面にはWASEDA、WORLD、そしてカシオペア、天空のWとWの文字をいっぱいに描きました。奥島元総長の唱えたグローカル（グローバル＋ローカル）ユニバーシティー早稲田を表現したものです。

図２　塔頂の稲の甲骨文字と三つのW

写真２　塔頂の稲の甲骨文字

西北の壁面に表情をもつ 250 尺塔の最上階、16 階は校友サロン、校友が広い視野から全体を見渡し、グローバルの中、ローカル（早稲田）がいかに行動するかを構想する場としました。15 階の展望レストラン「西北の風」（※2015. 7. 31 閉店、2016 年３月下旬にリニューアルオープン予定。）は、よく晴れた日には西に新宿の高層タワーの合間に富士山が、北には筑波山が遠望でき、大学の人気スポットになっているようです。近景としては大久保早大理工キャンパス、戸山文学部・文化構想学部校舎が識別でき、真下には早稲田キャンパス–大隈講堂、會津八一記念博物館（旧図書館）、演劇博物館、赤い屋根瓦を持つ旧校舎群、大隈庭園が風格ある姿で目を楽しませてくれます。加えて総合学術情報センター、高層の新 14 号館、新８号館が加わり、新 11 号館の工事も始まっているのが分かります。つづいて高層新３号館が加わる予定です。

写真３　展望レストラン「西北の風」

（閉店前）

大隈記念タワーは主に文系大学院の研究室、実習室、教室などに利用されていますが、10 階 125 尺フロアには、125 大隈記念室が設けられており、ここから 125 尺の大隈講堂を眺めつつ、大隈重信の望んだ目線について考えるのも一興です。

マンサード屋根の小野梓記念館

小野梓記念館（27 号館）は６層（地下２層、地上４層）の建築です。外壁は 1,200 度で焼き上げた茶系の信楽の磁器タイル張り、屋根は旧図書館に同調して、年を経れば緑青の吹く銅板葺きマンサード屋根としました。中庭には若き小野梓の胸像が置かれております。小野梓（1852～1886）は 33 歳で没しましたが、大隈重信の政治・財政面のブレーンであり、大隈の学校設立

の理念―「学問の独立」に賛同し、学校創設に中心的役割を果たした人物です。

写真４　大隈記念タワーと
マンサード屋根の小野梓記念館

写真５　小野梓胸像

小野梓記念館の地下ホール、小野記念講堂は講演会、シンポジウム、そして小劇場としても利用され、オープニングには校友森繁久弥が駆けつけてくれました。この小講堂はオープニング以来、多様で幅広い利用がなされ、また、街に開かれた１階のワセダギャラリーも工夫を凝らして展示を続けています。

小野梓記念館は主に法科大学院の学習空間として、教室、演習室とも目いっぱいに使われ、特にマンサード天井の４階学習空間では学生たちが 24 時間パソコンを携えて熱心に研究しております。

小野梓記念館には５層吹き抜けの中庭、中空を囲んで広い回廊をとっておりますが、これも有効に学生たちに活用されております。あちこちに２、３人また５、６人と、グループで打ち合わせや談笑したり、対面的コミュニケーションの場になっております。

大学も単なる機械的情報の箱とならないように、「アソビ」空間が必要だと考えておりました。「アソビ」は、システム化されてゆく大学や現代社会にとって、ますます大切なものとなるに違いありません。

※マンサード屋根　17 世紀のフランスの建築家フランソワ・マンサールが考案したとされる屋根。寄棟屋根の外側の方向に向けて2段階に勾配がきつくなる外側四面寄棟二段勾配屋根。

図３　小野梓記念館の断面

門のない大学－早大正門前整備計画

早稲田大学正門前整備計画は、正門前にあった第一、第二学生会館が、大学紛争時、学生などの占拠するところとなり、劣化が激しく、これを解体し、学生会館は記念会堂側に新築されました。これに伴い、この地区の整備計画（企画・構想・計画）について、2000 年に大学から私に依頼がありました。ちょうどこの年、大隈講堂と旧図書館が、私が会長を務めていた東京都景観審議会によって、東京都歴史的建造物第一号に指定されました。

正門前整備計画ではこの界隈を、歴史と文化

を引き継ぎ、これと調和あるものにすべしという条件を前提として作業を進めました。

小野梓記念館は、旧図書館との釣り合いを図り、高さを抑えマンサード屋根としました。また大隈記念タワーの外壁は、大隈講堂と同系のやや明るい色合いを持つ今の姿に落ち着きました。大隈講堂は80年を経て、外壁に時を重ねて「いい垢」がついておりましたが、外壁のスクラッチタイルの剥落が激しく、新しく張り替えたのでタワーと同じになってしまいましたが。

正門前整備計画として特に意を用いたのは外部空間の設計でした。大隈記念タワー前広場と小野梓記念館前広場は植栽をしつつ、大隈講堂前広場と一体になるようにし、スクールバスターミナルのある街路、早大正門通り、南門商店街通りの電柱は地下埋設とし、緑を縁取りして大隈庭園の緑と結合させました。正門前広場が早稲田キャンパスの木々と視覚的に連続し、全体として関係づけられて、これまで雑然としていたキャンパスの玄関が大学らしい落ち着いた雰囲気が出たなと思っております。

早稲田大学は街に開かれた門のない大学としての伝統があります。小野梓記念館１階のワセダギャラリー、大学の案内所、地面まわりの利用が当初の企画のままになされつつあり、街と共生する大学街計画としては好ましい方向に動きつつあると思っております。

写真６　南門商店街（整備前）

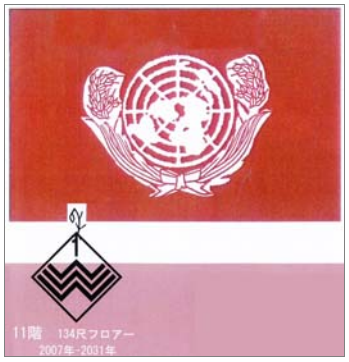
写真７　南門商店街（整備後）

大隈記念館２５０尺階段室の展示案

一年一尺を刻む250尺塔の階段室に、W 0年～125 年～250 年を表現する早稲田物語パネルを考えました。１階０尺フロアには、創設時（1882年）の大隈重信の肖像画と明治創設時の東京専門学校、そして階段を上るごとに大正、昭和、平成へと大学の歴史を記録したパネルを打ち付け、大隈の望んだ目線を刻んだ215尺フロアには、早稲田125年式典の図柄を掲げる案です。

そして、W125年（2007年）～W250年（2132年）の第二世紀、グローカルユニバーシティとしての早稲田の課題と展望、例えば「21世紀日本のかたちと早稲田」「地球文明のゆくえと早稲田」などの書き込みパネルを用意したいと考えました。

図３　グローカルユニバーシティ
早稲田新マーク（案）



21 世紀、日本の劇的人口減少、地球温暖化、大隈さんの時代を越えて地球文明の中の早稲田としての役割を、全学的に議論してほしいと願いました。その一つとして、国連本部をアメリカから南極に移すべしと、大風呂敷を広げてみるくらいのことがあってもよいかもしれません。しかし、この階段室展示案は未完です。

大隈記念タワー前広場には、九州から運んできた樹齢 70 年余のクスノキを植えました。これは伐られさえしなければ、あと 100 年は生き続けることでしょう。早稲田第三世紀の始まりの年、2132 年、早稲田 250 周年記念の祝賀会が行われるまで、これが生き残って早稲田を見守ってほしいものだと願っております。

正門前整備プロジェクトは、総合監理：総合企画部、設計監理:正門前整備計画設計室（代表戸沼幸市）―戸沼研究室（松本泰生 他）、U研究室、アトリエ海、田中彌寿雄構造研究所、井上宇市設備研究所との共同作業によるものです。古谷誠章、後藤春彦両教授にもアドバイスを頂きました。

スカイラインの群造形

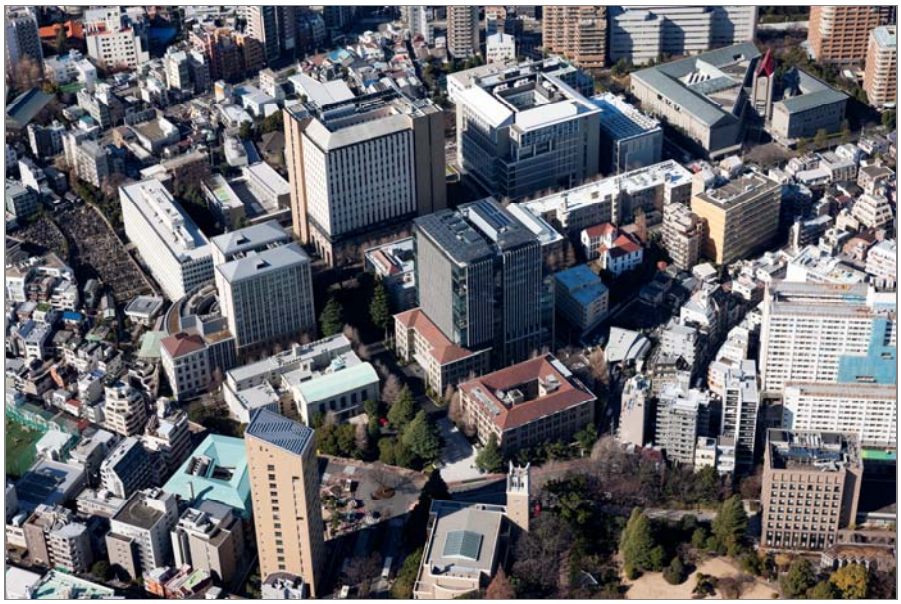
戦後 70 年、早稲田大学の本部キャンパスは創立 125 周年記念事業として、大隈講堂の改修、大隈記念タワー、小野梓記念館の建設を行いました。つづいて伝統的校舎、３号館をそのたたずまいを生かしつつ新３号館として高層建築化を果たしました。

これらの高層建築群―伝統的瓦屋根の中層校舎を生かしつつ棟屋を乗せた新 14（44m）、８（52m）、11（69m）、３（68m）号館の高層４棟は 250 尺（76m）の傾斜屋根の大隈記念タワーと呼応して早稲田キャンパスの領域を示して新しいスカイラインの群造形を表しております。このスカイラインは大隈講堂時計塔 125 尺（38m）を受け取って、互いに対話している図になっているのです。

情報化、グローバル化が各段に進展する時代情況に対応しつつ、更新を続けてきた早稲田キャンパス（74, 448 ㎡）整備も一区切りしたことになりなす。

写真８　大隈庭園からみる早稲田キャンパスのスカイライン

写真９　早稲田キャンパスの群造形



６．創立１５０周年に向けて

現在、戸山キャンパスにあって、毎年万余の新入生の入学式、卒業生の卒業式の会場となった記念会堂が創立 150 周年に向けた事業として更新されることになり、この建物の取り壊しが始まっております。

早稲田大学は創立 150 周年（2032 年）に向けて、白井克彦前総長（15 代）を引き継いだ鎌田薫総長（16 代）は改めて大学をアジアで存在感のあるグローバルユニバーシティを目指すとしております。

10 月 21 日は早稲田大学の創立記念日です。例年これに続いて、11 月の初めは全学をあげて、早稲田祭が行われ、今年も現役の学生、ＯＢ、ＯＧ、父兄、街の人々でキャンパスは大いに賑わいました。

キャンパス風景も戦前と戦後では全くの様変わりです。角帽、黒い詰襟の学生服姿の男子学生は絶滅種で、代わってファッショナブルな女子学生が学園を闊歩しております。戦前、早稲田大学は、大正期、ようやく女子学生の入学を認めましたが、1939 年の女子学生は４名（法学部１名、文学部３名）でしたから隔世の感があります。現在、外国人学生は約 5,000 人にもなりました。そして社会人学習の場として、全学は開放されてもおります。早稲田大学はもともと門のない大学でした。

グローバルとローカルを取り込んで、田圃の中につくられた早稲田大学は歴史を重ねつつ、やや泥くさく、新宿の街の中にあって未来性を含んで 21 世紀初頭の我が国の大学の一つのかたちを顕しています。

写真１０　大隈重信銅像

（2015. 11. 25）